



その予算は「ムダ」なのか？

館の負担となる利用料金の設定を極限まで削ることにした MAPPS ですが、「何もそこまでしなくても…」というご意見をよくいただきます。でも、そうでもしなければ、小さな館は予算を得られない。何しろ、こんな状態なのですから…。

設置者の財政力そのものは差がないのに、館が確保できる予算額に何倍も開きが生じる。これは、自治体の考え方に大きな開きがあるということなのでしょう。

予算配分の方針はもちろん自治体それぞれ。削減にも概ね賛成です。しかし、ここまで極端になってしまうと、現場の努力ではどうにもならない…と館が諦めかけても無理はありません。だからこそ MAPPS を企画したのですが、背景には「博物館とお金」の現状があります。

削れ、削れの大合唱に晒されて。

博物館の予算を考えてくれるのは、自治体だけではありません。文化庁や国の各種機関が博物館を支援するための財源を用意している場合があります。これを利用して助成金を確保できたという嬉しい報告もありますので、ぜひ活用したいところですが…思わぬ盲点もあります。

せっかく苦労して得た助成金が、自治体本体の収入となくなってしまうことがあるというのです。財政課から「助成金を得たのなら、その分、本来の予算は削る」と査定され、館で使える予算の総額は結局変わらなかった…という例も。さらには、一度削られた予算が「実績」とされてしまい、翌年度以降のベースラインとなることさえあるとか。

加えて、自治体では予算を費目ごとに査定するため、ある費用を削って別の費用に充当することができない場合があります。費用科目間での調整が認められなければ、現場が努力して予算をやりくりするという「資金調達」の工夫にアタマを悩ませても無意味になってしまいます。

道理で館の嘆きの声も聞こえてくるはずですよ…。

無駄遣いの「ムダ」って、本当にムダなの？

開館時には予算がつくけれど、それを維持する予算はつかない。最近では、こうしたケースを頻繁に目にするようになりました。最初のシステム導入はしやすいのですが、その後の保守が大変。中には長期的な運用を考えていないようなシステムもあり、数年後には端末もサーバも老朽化しているので手の施しようがない…ということもしばしば。

こうした場合、システム全体を見直さなければ情報資産を維持できなくなるため、「それまでの努力が水泡に帰しますよ」と進言せざるを得ません。しかし、再構築にあたって、当初の構築時に匹敵する予算がついたという事例は、私の記憶では1件もないのです。それどころか、最近の傾向では「システムが壊れたら手作業に戻せ」という通達を受けている館すらあるのが実情。

リース契約で導入した場合は、リースが切れればシステムが使えなくなるので更新が必要ですが、そのタイミングを活かして再構築するという事例もあり、工夫次第です。それでも、イニシャルとランニングのコストの扱いがここまで極端に違っていると、現場は戸惑ってしまいますね。



空調の予算が尽きたある図書館では、冬の間、利用者がコートを羽織ったまま本を閲覧しているとか。コストカットは当然かもしれませんが、それにしても…。

「無駄遣い」や「マニフェスト」といった単語が急速に一般化したのは、テレビが連呼したから。しかし、市民の資産を守れないほど削るというのは、果たして「ムダの削減」と言えるのでしょうか？ 疑問を持つ昨今です。